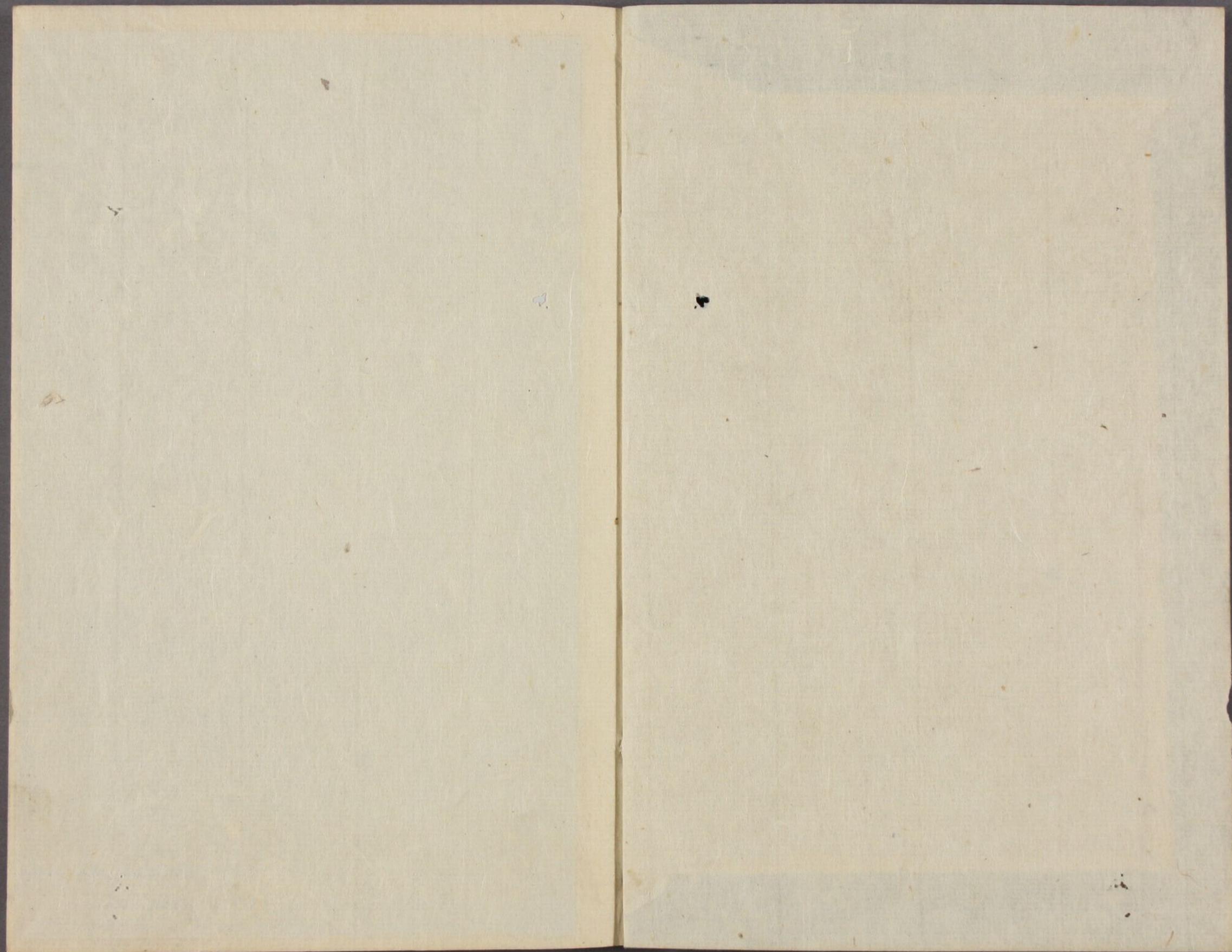


後撰集新抄

秋下

七





後撰和歌集卷第七新抄

秋歌下

題云々

よき人〜ら

菫をかよき人なみやまぬあらしあぐれの雨はぬ〜らえつるぬき

○蘭ランの雨アメぬきそそツあふほてあるをえてかの袴ハカマきよる人のきよふか

くまゆるすあぐれあぐれの雨アメは令濡ユラシ初ハツえつるすふやとりやなり。

立タチ子コ裁カ初ハツ子コ襟エをカけケり。きよ袴ハカマとりあふよりてあきの袴ハカマの如

くいはるす。古今イマコト上ウヘ。ぬき〜ぬき香カこそあふへき杜ツツジのあふたあぬき

かけ〜あらしをかよきもなほ不フ同トウ。菫スズメ袴ハカマハ花ハ葉エ茎キともふ女郎花ユウリョウガ

お似て花ハ浅紫アサノなり。香カはさ〜もなつか〜いあ〜いど。い〜く源

き物なり。縣ノ飛ト大人オホタチなどの後ノチも同トウ。和名抄ワナヒナヒラキ子コ蘭ランの字ナリをあ〜ら〜



すハ秋風のおくかとはてまびーをさそるすもとなんべー。

歌三十一

よみ人しらす

花すくまをよしそやま記筆なれがみおなるとハ頼すれなく
○薄ハ実なすぬおたりうばへの花ーま人も万ことすくまきを
いさんとのあたりと抄よんしすのめくなんべー。されど恋の
さめていなくた。大かこの世おありさ万をおもひよせといへ
なんべー。

秋風おさそそれさるかりがのまきおるか子今日ぞきこゆる
○かひて、雁ハ秋風お誘されてわさるといあやなるがまはや其時
が来て今日ぞ雪お遠お誘おるがきよふとまきなり。此あきてまか
まか^{カリガネ}を雁之音のまよさるまよまよ。かりがのまきを雁のまよ
いへるとハ本末のまひあり。

万葉十小。天雲のよそよかりがのまよよりまよとわを雁鳴と出
き又同巻にも雁之喧。雁音菅家万葉に雁之聲者なども出するをも
りよんべー。下に州よりまよもかこも振なれやとるねご
と小かりくと鳴くとまよのまよも又合すべー。
こーのかりが小。あや人侍る時小。

○こーのかりがとハ。被前被後のまよ方をいふなり。

巻二

秋乃秋小かりがのまよなるなり我あや人のことつてやせー
○抄よハ。かりがもなきまよハ。存やらんお誘るとなり。是も藤武が古事
より。被前なる人のなつかりまよがまよハ。なまきかとのらなりと何り。
又。かりがまよハ。かりがの誤なまよしと。かま磯足といりまよ。磯足
張お起の人やて。終る。藤麻呂云。かりがまよハ。即雁のまよなり。さ
大人のまよへ子なり。

さか。をーか古所ちかもなとも。すべて其殺の香をかもとりふな
むとあふとく。師云。は説もさる事なれども。こハ一説といふ
べし。はあやそき。か。が。の。誤。な。う。ん。の。説。あ。ろ。く。お。お。ゆ。と。い
それより。ま。こ。小。林。茂。岳。ハ。か。り。か。も。ハ。雁。哉。な。る。べ。し。句。の。結。の。か
むの云々。は。集。の。以。ち。か。な。と。い。ど。か。る。不。考。か。な。と。い。れ。れ。ど
ふ。故。な。り。さ。そ。か。も。と。か。な。と。い。を。御。異。な。り。一。首。は。ま。ハ。は。林。の。秋
の。不。考。考。考。考。考。ハ。森。島。人。の。住。で。有。る。飛。路。より。有。る。雁。カ。ヨ。ヤ
ア。さ。す。れ。ど。か。の。島。人。か。定。て。ま。つ。て。を。為。し。か。な。ア。ラ。ウ。と。云
な。る。べ。し。と。い。は。る。は。説。考。抄。の。説。も。色。々。れ。ど。於。委。一。ま
なり。茂。岳。ハ。伊。勢。國。久。居。の。殿。人。なり。

秋のや戸秋のや戸とびとびけりけりかかりりゆゆふふかかききぬぬるるああままゆゆななりり
むむののやや戸戸ととびびけけりりかかりりゆゆふふかかききぬぬるるああままゆゆななりり

○子世かかきぬ昔より今の世までいつともまきぬとまきぬ
是。こは女所入也か又も賀なものをり秋風の新をもあ
か又た何となくよきもあらんか。

よみ人しらべ

おとよと毎日乃ゆくもまきぬつるを啼き秋をとつげたれるま
○おとよとハおとよとてのまきぬとてあてとてのまきぬとて
万葉ふま多あり。申にも卷十ハおとよと隠居而々ハ足さきカキ
か乃山を毛つきふり。とあるなどハ奇事まもや似たり。古今上
引ると何と目かきぬおをうたのま云々などもまきぬとて
とておまきなり。東向ハ異本ハ秋とあの方まきぬとて
や万とハよかりけりといふ。

かりうの鳴るなごかり衣あつた山はまみちらにり

○此の万葉十子詠黄葉とて四十一首出する中好ありて二句来鳴

一共子来鳴一なごかりの鳴るなごかり衣あつた山はまみちらにり上取小来

句モミチツタケリ黄始有とあり人丸集とつ拍子ハ来句いらげきふたりとあり

於万葉のけすの次子ハかりうのこなきくなふあまよりちか

すがの山を黄始モミチツタケリてん又モミチツタケリかりうのこなきくなふあまよりちか

の上の草ぞ色づきふるなごかりあもあり詠をも大かる似り

かり衣いたつ田といもん料の枕詞なり

歌一らき

お風ふきはまわるるかりがのこ拍子人の名をよき一平かなん

○お風ふきはまわるるかりがのこ拍子人の名をよき一平かなんヨケ

となり古今夏夏山はななく郭はあつた拍子歌子あなまきかせ

きもや似り十一旋よくハ万葉十一旋曲道ヨキミチとあり直子スゲりへき

道を外へまてるやう直道のなればなり直道の今俗子ヨケ直道の几とい

ふ子何ト古今直道の夏風を花のあつたよきそふけらかりやう

ろふと見ん又直道の一もといよきそふけらかり本括女の余の余は

の余の余よきぬ道なり直道のこれぞななど直道のおかしく直道のお見えなり直道の

お直道のよけと直道のは持直道のちも直道のさ直道のき直道の又直道のよく直道のよ直道のう直道のよ直道のう直道のよ直道のう直道の

さ直道の又直道のよ直道のう直道のよ直道のう直道のよ直道のう直道のよ直道のう直道の

あて直道の必直道の信直道のむ直道のべき直道の詫直道のい直道の葎直道の葉直道の万直道の葉直道の子直道の秋直道のの直道の舟直道のを直道のむ直道のよ直道のき直道のん直道のて直道のせ直道のぞ

や直道のと直道のと直道のつ直道のよ直道のを直道の芥直道の栖直道のと直道のかり直道のて直道のか直道のせ直道のあ直道のひ直道の又直道の曾直道の丹直道の葉直道のに直道のま直道のつ直道のま直道のつ直道の

ふ直道のま直道のつ直道のの直道の操直道のふ直道のさ直道のん直道のよ直道のら直道のつ直道のき直道のれ直道のや直道の花直道のの直道のあ直道のま直道のつ直道のい直道のと直道のつ直道のよ直道のを直道の誓直道の沖

法師の餘材抄子引かきたるやそのゆへに

たまきけとなくかりづもぞおののを我が末をす鏡がそにきりそ

○抄子者の尾花の足渡しお存がののすゆるお感とそ誦なりとある。

総へし。 已向を基が末をハ抄本にす息と假まめてあり。然き

どもこちうまよとよせんも然るべきか。けあハや古き調おすゆれ

おなり。 たまきけとまこといふ。我おすけよのんなくんとり。

余情をふくむなるなり。それハ三句。我君のとつひ。末句おさび

あてとあるゆへ。さうすゆるなり。 さうさハさか雑げなり。古今

下。我やおさけるおなまきう人。まことおのそ人の足さうん。

と皆回し。

ゆきうへるもかこも松なれやる。松ごとおうりくとな

○舊ハ何雨ととも松なれぢや。毎秋あるごとく。そを引ゆりつ。か

まきくとまきくすよとなり。 初句。末句。うけてら。後。朝。夕。日。夜。小。性。ひる。り。なり。暮。ま。て。秋。時。り。お。ま。あ。

ら。 かりくとハ假の世假の宿などり。かりゆて。 常。住。な。假。初。は。さ。ら。ぬ。

まじへるなり。次二首。いへるも同し。又万葉十子。ぬをさかたねわ

たるかりのおぼし。くよをへてあおのが名をのるともあり

て。かりとつよ名もまじ。かれがなをすよ。おほせ。す。す。

畧解。おそく。す。す。の。り。 す。て。草。木。鳥。獸。な。ど。の。名。大。う。へ。ハ。其。形。を。お。も。る。れ。ど。い。ま。密。其。時。存。な。ど。お。よ。う。て。お。ほ。せ。る。物。と。お。ま。く。ま。の。考。へ。ぎ。

松ごとくおまれどかくきわたのまぬを弄ふたそつかりとのそなく

○松まきてもとまきくすよ。まじ。必うへる存なれば。ま。と。そ。誰。も

実ふを頼まぬ。おを。我。の。假。お。ま。の。と。表。お。あ。の。い。え。時。あり。く。

よとあり。

むすすに里が思をなくよおのきさへかりくとのも時をさす
○一首れきハ上の奇小同ト抄よハ假の世界ながら我ハ一向おも
え思ひとて実有の相お名一あるに己さへ假くと時をさすよと
なりともありかくてハ葦花万葉子歌なるぬ身をあきぬきぢ白雲子
飛をさへぞかりと春をなくとあるよ似るおもぶきなれど程は
後ちいりとなり二句のなくにとありてらん^ハとちめする勢ひの
二句の子そいふ力ありてい^ハ又おのきさ人とあるにもかなをん
利と云身を取てすく格なり
と帖子ハ^ハむすす^ハ小我づきかなくふまわけてかりとくと告わ
るんとあり
人のかりのまふるととやをすて

○此詞中ハ侍なる人などの存の存をすてあそれ存ハ本小
けるよと云るほどの詞の勢ひにて時節を感とていへる
まとすゆるなり存ととてける^ハと何とて子をはいまゆる
愛極なればなり^ハと^ハ交るおまおちよそ上ま切く格乃評
より交る可定まりなる事玉結みの巻子意
と^ハなり^ハむす^ハき見てるるべし

みつこ

とごとくおを路まどもぬかり^ハと^ハも^ハら^ハう^ハや^ハ杖^ハを^ハさ^ハら^ハん
○雲霧深き水國の空ハ又けもまふへきをまどまどしてあるハ自然
と^ハば^ハ南^ハ方^ハへ^ハある^ハべき^ハ時^ハを^ハ知^ハす^ハの^ハ故^ハや^ハあ^ハら^ハん^ハか^ハら^ハも^ハ年^ハ毎^ハ子^ハま^ハい^ハ
ぎまきるハ^ハより^ハま^ハさ^ハな^ハん^ハし^ハん^ハづ^ハの^ハい^ハん^ハの^ハう^ハら^ハと^ハり^ハあ^ハ子^ハま^ハい^ハ
かま^ハい^ハの^ハら^ハと^ハり^ハと^ハり^ハま^ハさ^ハな^ハり^ハ
^ハつ^ハま^ハ脚^ハ絆^ハと^ハい^ハま^ハん^ハが^ハあ^ハら^ハま^ハい^ハ
^ハお^ハの^ハづ^ハの^ハう^ハら^ハな^ハど^ハの^ハ詞^ハみ^ハあ

おな 古今^下 風を花のあやういよまをふけらづうらやうのふ
とらんなど考へ合すべし

やうと小まかりける時こそかきともや

○ともゆてま 銚共^{モロトモ}子ととまゆとせ也 陪從^{トモ}のまをま阿^アとせ

るべし

よし人あらし

天川^{あまがは}かりぞともふふさ知山乃^{こすあを 万代集}こそあまらるも色づきふけり

○唇の雲路をわするをやうて其雨の川の流と天上なると同名なる

ゆゑ小思ひよせてあやとせなるべし ともわするも川の縁流な

星^星 川^川 水^水 門^門 など 天川^{天川} の大和^{古野} 郡^郡 中も河内^{交野} 郡^郡 あり 此^此 亦^亦

よあするハ 詞^詞 女^女 小^小 よるに 大和^{大和} の方^方 なるべし 一本抄^{一本抄} 曰^曰 後^後 成^成 曰^曰 天乃川^{天乃川}

言のつみをあふ白波 師光朝臣 雲の色をむとのかこ免て天川
くもたふゆとやみよし時^時 の山とあるなどハ大和國^{大和國} あり 統後^{統後} 攝^攝 皇^皇
系^系 系^系 天川^{天川} をきわたり小なりわたりかきゆのみのみ月雨の
ころ新^新 拾^拾 遺^遺 云^云 亦^亦 津^津 守^守 國^國 助^助 若^若 加^加 きぬ天の川^川 系^系 やうかきま 交^交 神^神 小
花^花 の蔭^蔭 なかりセバとあ 佐^佐 保^保 山^山 の大和^{大和} 郡^郡 上^上 たり

善^善 補^補 朝^朝 臣^臣 左^左 近^近 少^少 将^将 子^子 侍^侍 ける時^時 むさしの侍^侍 馬^馬 むかへ小^小 まかりと
つ日^日 不^不 足^足 加^加 子^子 さはる事^事 ありてかきりまおなドつかさの少^少 於^於 小
てむかへ小^小 まかりてあふ坂^坂 より隨^隨 身^身 をまけていひおたりはべ
まける

菅原忠房朝臣

○近衛の中於少於とも小左近^{左近} 人^人 つかし 職^職 原^原 抄^抄 など小
えしり 善^善 補^補 朝^朝 臣^臣 左^左 近^近 少^少 将^将 藏^藏 人^人 十七^{十七} 年^年 藏
人^人 頭^頭 忠^忠 房^房 朝^朝 臣^臣 左^左 近^近 少^少 将^将 十八^{十八} 年^年 四^四 位^位 上^上 少^少 将^将 と

公卿補任不足なり。侍馬迎とハ、毎年八月の十五日。但右
 五日なりし加ども、朱雀院の時國忌あなり。十七日、廿日、廿三日。
 廿八日、小信濃、甲斐、武藏、上野の國より、牧馬三ノ馬を奪るを、近衛
 司の、達坂まで迎へらるるなり。廿日、小武藏國、小野、侍馬
 四十匹、秩父、侍馬廿匹、立野、侍馬十五匹など、又延喜式
 幸中行幸、注等。延喜式 又補任、以、御迎の使あなりて、出立んと
 せし時、小俄、小故障ハルコト出来しれど、同官の忠房、朝臣かて、達
 坂た子、是より、後、召具、せしむる。隨身スベシを、京子、ゆして、以、衣を、兼
 補、任の、許、おとするなり。隨身スベシハ、ズ、井、止、レ、と、花、多、餘
 情葵也。職、小より、隨身を、給、さるハ、か、ぎ、り、ま、さ、出、仕、の、び
 尔、よ、の、考、め、し、む、す、る、なり。是、亦、か、時、不、あ、る、が、ひ、て、一、人、づ

を、一、わ、り、す、を、か、り、の、隨、身、と、し、ふ、なり。假令、納言、の、大、將、以下
 也。左、ハ、右、ハ、右、ハ、右、の、番、長、一、人、近、衛、五、人、す、て、六、人、の、隨、身、致
 ゆ、さ、れ、て、召、具、さ、る、なり。その、うへ、ハ、拜、賀、な、ど、の、時、ハ、於、監
 物、曹、府、生、を、又、一、人、づ、具、さ、る、を、一、員、と、も、か、り、の、隨、身、と、も
 り、ふ、なり。い、づ、れ、も、皆、地、下、の、輩、な、う、と、思、へ、り。但、隨、身、を
 か、へ、さ、る、ハ、空、り、た、る、例、ハ、あ、ら、ざ、る、べ、く、思、さ、る。お、坂、子、一
 日、り、あ、る、べ、き、事。能、ま、ど、も、け、き、を、お、と、ん、料、の、と、亦、か
 へ、さ、る、べ、き、事、ハ、あ、ら、ざ、る、ハ、何、か、其、の、返、さ、る、べ、き、事、と、思、へ、り。
 か、へ、さ、る、ハ、序、小、を、ば、ま、の、せ、ら、ま、さ、る、な、ら、べ、し。然、ら、う、く
 考、ふ、べ、し。

秋、務、乃、乃、乃、野、の、弱、を、む、く、と、記、ち、ん、の、り、を、考、ぞ、く、ひ、し、き

○秋を務のハ、その時節の物を以て、たらし時といふん料の、枕詞とせしむるなり。上、折本、あふ、坂、よむ、く、ん、約、を、秋、務、の、ま、 立野ハ、武藏國の牧の名なき事、廻書之位に記せり。此、加、と、こ、ろ、と、ま、戸、ほ、く、れ、と、も、あ、り、 此處ハ、たゞ馬の事なり。必子馬スコなるも、こゝにこゝとりふき常なり。漢籍、子、駒、の、字、を、き、へ、 今、小のりてハ、も、同、ト、き、方、な、り、 萬葉ニハ、ん、小、の、り、て、ハ、 前ガキの翁の翁乃、後乃、妹乃、小をよけるかも、とて、縣居大人云、卷十四、東宮に、白雪の依ヨり、ゆもをゆせりと許ヨ己呂ロ能里リ氏テをかなしけ、とりふを以て、又まば、妹が事、常小吾人のうへ、小をるをり、ふなり、云く、荷前ハ、何まの國もあきと、東國より、年ごとふも、トをよま、調物を、荷前と、り、遠き國より、ま、なれ、は、こ、小、納、て、紐して、馬、小の、せ、著、て、よ、る、小、荷、の、依、と、も、常、と、り、ふ、も、有、と、い、ま、れ

り、のりて、馬の、跡、な、る、事、下、離、小、お、と、れ、ず、が、ん、ふ、の、り、て、こ、が、る、ま、は、波、小、も、と、免、よ、舟、ハ、な、く、と、も、と、あ、る、舟、の、跡、よ、り、へ、る、小、同、じ、但、一、萬、葉、十、四、の、系、歌、で、は、一、と、馬、每、な、ど、の、跡、な、し、一、と、い、へ、一、と、と、え、し、ま、り、

在系え方

る上、ある、時、乃、ま、も、秋、ま、な、か、を、あ、ふ、こ、ろ、あ、く、と、ま、り、な、れ
○古きと、り、小、時、の、事、も、秋、ま、や、り、色、の、か、ま、り、て、新シラふ、なり、よ、ま、よ、ま、なり、免、こ、と、小、改、ま、る、と、ハ、即、舊、新、小、名、の、う、つ、ろ、い、變、る、事、な、り、 在古、時、と、り、小、對、へ、て、新、ま、る、と、ハ、い、ま、れ、さ、る、なり、

よ、ま、人、不、知

秋乃野の跡、ゆ、ごと、も、見、ゆる、か、南、宮、お、き、跡、ハ、そ、先、ト、と、ま、り、小
○秋の、時、が、跡、の、ゆ、く、ゆ、も、見、ゆる、事、か、ま、お、く、跡、ハ、白、鳥、を、れ、ば、え、か、や

う小深色ハセドと申ふよ、いこうでかくハ深つしんとなり。六帖の
末句、おのトとぞあふとあり。

秋乃野色、いづれも露の おけバウを おきり免おんばらおん秋葉の色かきしる露

○おきり免オキツキ置積オキツキまばなり。四句、本集の方で、ちよりのといふ
る。秋葉へかきしるいづれも露もなべて冬のかきしるま、いづれも露
のたまつむ故ぞとりあき。六帖の方なれば、ちよりにとりあき、色か
きしるとりあきかきしる。紅葉も黄も濃くも薄くも、おのがさかか
糸色の變るをあやし、ぶさふなるなり。はあき、ハハ帖の方ま
まざりなり。

いづきをかきして、のぞん秋の野、うろもんとて、冬かきしる草
○け奇のま抄ハ、秋野の葉、冬の色、くんとて、冬かきしる草、のなべて

あまれなきが、いづきをとりわきて、冬かきしるのぞんとなり。とあれども、
今思ふに、秋ハ、あき。うろもんと、冬かきしるや、枯んとす
をとりあきとす。ゆのろも、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
ども、うろも、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
で、秋方ハ、冬なり。一昔、秋ハ、秋の野、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
ま、いづれと、二や、あるを、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
なれど、今思ふに、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
だ、ハ、あき。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
そ、わきて、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
とある、秋ハ、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。
は、ろも、冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。冬かきしる。

る傳勢とまゆなり。

紀ともあり

あつたてなまきぞ志ぬべき秋山止指務小友まどをせざる麻子もあらしもせ
○抄子ハ秋の務小友まどはけして伝麻の香ふ秋の感情を催されて香
もな加ま知一きんならふしとあまきも今あつ子秋のあよいあらし
で志難なまどのあなまふし。 初二句ハ香をたたく伝ぬまきこち
のせしむるとりまきなり。抄子な加まほきんと
乃まぎれよ友をきいて尋ぬとて香をあげて伝て麻あてまなまき
ども我も伝麻のぬくふ香をあげてなまぬまきこちのせしむると
よといへふなれど下句もたふ香たてしとといまん料のまにま
あらしもあつ人のまをきひするなまゆりゆりわたるへしとまきも

ありげ小つゆきバ。志難なまどあつとまきなり。すべて。割
麻子のあらしとどなどりあつて。まきこちのまき子。いとよく似るを
りまきなり。今世の伝も。麻子ハ針イガ云くとりまき。考まきあり。
なまどつせしハ。いしよと。友を足きいて尋るまきなり。推形考
小。朝霧小友迷をせる麻子香を大かやまを何それともまき。又拾
遺。久されだ伝係の川原乃川風小友まどいせするまきなくなり。な
ど形多かり。

よみ人不知

たまきけとこまきさどふまき一かのまきし香をむとりなくらん
○初句たまきけとハ。我もまきけとのらちて伝くなくん。とまきをみく
免り。上小。伝まきけとなくかりが子。我香の尾伝の末を
とがく小して。とあるまきも引合せてらぬし。二句ハ香
まきとつせしを。まきふまきかけなり。まきハ。山のあまきなり。末句ハ。
ま中まきしりるがめし。

麻の妻を妻よとて啼くなれど、むよりなくらんとをいへるなり。さ
て、我が一人寐きて、きくを予く先なるなり。一首詩をハ、我
が一人寐きて、衣の長きをわがる。以しも、山也の麻、妻を尋るく。
衣もすがら啼くハ、情ふきけとて、情もならん。我も泣いて、さびしさを
そよよとのんや、と、いふなり。

折きて、かげとぞ、たのせ、半乃松を、どる。秋の風、さう、門の空
○折きて、ハ、末長く、つらまでも、といはんが、ぬし。末長く、我が頼む、
と、思ふ松なれど、つらまでも、頼り、失き、さう、なくも、が、なとなり。 乞
ゆるハ、樹木の、紅葉す、さう、なり。木葉の、もみづる、ところハ、又、木葉の、散
る、その、なれど、其、秋風、など、ふ、散、失、す、さう、ぬ、か、ま、と、いふ、なり。と、師、翁
い、れ、り。 二、句、か、げ、と、ぞ、た、の、む、ハ、夏、の、細、珠、な、ど、の、露、を、て、万、葉

七、糸、か、を、か、の、け、む、か、の、を、不、推、万、か、ぎ、あ、と、い、は、夏、の、か、げ、お、な、み
ん、か、も、と、あ、る、な、ど、の、露、の、も、な、ん、か、又、ま、人、の、汗、な、ど、ふ、き、り、さ、る
あ、や、て、み、く、た、さ、さ、も、あ、る、に、か、今、ハ、あ、り、が、し、い、あ、友、則、来、子、に
え、さ、れ、ど、も、細、珠、な、ど、も、な、け、さ、ハ、こ、と、ふ、考、ふ、べき、す、し、も、お、し、し、れ
ど、ま、づ、ま、夏、の、露、が、さ、う、な、ん、と、い、ふ、なり。

○秋の、あ、づ、れ、の、あ、ま、バ、山、か、の、あ、ひ、や、さ、さ、さ、さ、さ、何、か、こ、の、思、つ、け
さ、れ、子、お、来、す、し、ん、と、い、ふ、なり。秋、の、風、の、あ、く、ゆ、つ、け
て、ぞ、お、も、ち、ゆ、さ、さ、ほ、の、山、へ、ま、今、や、も、み、づ、る、と、あ、る、も、た、か、こ、ゆ、こ
に、
と、ま、く、く、り、か、く、國、唐、の、王、維、韓、愈、な、ど、が、待、ふ、足、ゆ、れ、を、さ、や、く、よ、り、か
し、こ、の、ハ、ま、ん、物、を、万、葉、ハ、ま、く、黄、葉、と、ま、又、赤、葉、と、も、有、紅、葉

冬もいへるや。万葉の
 方を以てわきまふべし。二句ハ。秋もなるかある本もあつた
 ふす。抄小足え。六帖。友則来たるふも。あるかなとあり。ようて。只
 亦。本集子。なるか。あるも。必写保するものなるべし。かく。さ。月
 文字。阿まう。秋。は。集。な。の。こ。ろ。小。を。を。く。例。な。起。す。な。れ。ば。な。り。
 古今集。は。集。な。の。う。り。子。載。集。の。以。ま。で。五。文。字。の。句。を。ら。そ。と。小。七。文
 字。の。句。を。八。文。字。ふ。よ。む。や。む。の。中。間。ハ。あ。い。り。村。の。う。ち。の。文。字
 ある。句。子。か。ぎ。れ。の。う。ち。で。い。せ。の。あ。の。こ。と。と。や。い。ま。ん。な。ど。や
 う。の。句。小。限。ま。り。委。く。ハ。終。屋。大。人。玉。霰。ホ。わ。き。ま。え。か。う。ま。い。れ。だ。彼
 書を。足。又。右。を。よ。く。考。へ。わ。さ。て。ろ。ろ。ゆ。べ。し。か。く。あ。る。か。那。な。る。あ。と。二。や。う。な。る。中。小
 ても。あ。る。あ。の。の。方。物。さ。く。ま。ゆ。さ。る。ハ。初。句。足。る。と。ふ。と。あ。ま。さ。バ。
 初。句。か。れ。と。な。る。て。ハ。か。け。合。よ。う。か。く。の。ま。な。り。な。か。り。ま。よ。上。よ
 初。句。と。ま。ゆ。ま。は。さ。て。ハ。初。句。足。る。さ。え。龍。田。姫。ハ。風。神。也。平。群。郡。龍。田。坐。
 初。句。と。ま。ゆ。ま。は。さ。て。ハ。初。句。足。る。さ。え。龍。田。姫。ハ。風。神。也。平。群。郡。龍。田。坐。
 天。御。柱。國。御。柱。神。社。二。座。並。名。仲。大。月。次。新。嘗。龍。田。比。古。龍。田。比。古。神。社
 二。座。と。延。喜。式。小。足。え。あ。り。き。風。の。た。り。ぬ。も。え。ハ。年。毎。の。四。月。ハ。朝

延より。後。使。ま。て。紫。あ。り。し。も。古。書。子。が。く。不。足。え。り。万。葉。九。本。
 司。が。ゆ。き。ハ。七。日。ハ。す。ぎ。ト。龍。田。姫。ゆ。え。の。花。を。風。か。ち。す。な。と。あ
 り。も。風。の。神。あ。り。ま。せ。を。な。り。立。田。姫。と。し。ハ。立。田。子。大。ま。り。了。ん。
 姫。神。の。意。出。て。い。へ。る。な。り。男。神。を。立。田。彦。と。す。毛。同。ト。人。を。な。り。女
 子。姫。子。對。い。し。稱。な。る。も。ハ。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 上。秋。上。あ。い。へ。る。が。め。し。も。ハ。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 遠。ど。紅。葉。の。名。あ。る。立。田。の。社。小。ま。り。但。一。立。田。を。紅。葉。の。名。不。と。す。る
 川。紅。葉。み。だ。れ。て。流。る。を。り。ま。り。な。ど。の。奇。小。ま。り。て。立。田。を。紅。葉。の。名。
 不。と。し。ま。り。ま。り。了。ん。神。を。ハ。秋。を。つ。か。さ。ど。の。神。な。り。と。い。ひ。な
 せ。る。な。り。し。い。ま。り。へ。も。飛。鳥。の。神。並。山。を。こ。そ。紅。葉。と。な。る。而。亦
 上。立。田。三。回。亦。紅。葉。神。の。ハ。い。ま。り。し。な。り。以。此。の。人。を。な。り。奇。小
 伝。て。て。林。を。も。あ。や。く。と。り。な。り。秋。を。つ。か。さ。ど。り。ま。せ。る。ぬ。く。い。ま
 秋。上。ま。り。し。い。ひ。な。り。は。せ。る。よ。う。又。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 い。へ。る。子。い。ひ。な。り。し。な。り。そ。を。い。ま。り。な。り。は。せ。る。よ。う。又。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 を。深。遠。な。ど。す。る。子。の。龍。田。姫。と。い。ま。り。し。な。り。は。せ。る。よ。う。又。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 の。多。に。も。あ。り。ま。り。し。な。り。は。せ。る。よ。う。又。物。傳。さ。な。の。ゆ。に。あ。所。か。さ。さ
 女。格。の。名。

名不なすでも。そそ子も物のいと多くあらん小きおのけり名而
のめくなくんきむげ小あるまどき子にもあらん。いひなきもむむ
べき子にもあらん。どの神の侍上をあらぬまら子いひなきもむむ
ホなき世の子にもあらん。このまよかぬ子なり。かくが子。詞花
も葉のさそ。裁きのめくひなき。まなき。すより。終ふま。いひな
る神小たま。まんと。まに。あぬ。やう。かなり。そを。ゆく。は。い
らぬ。か。い。こ。あ。ぢ。ま。ま。わ。な。り。や。り。古。小。こ。る。ぞ。い
らん。人。ま。う。り。らん。す。ま。き。子。小。なん。あ。り。け。る。あ。ぬ。か。い。り。や。

源宗于勅旨

梓弓つるさ乃山也、の歌集林を勢はあつるごと小や毛万さるる 兼一

○初句ハ枕詞にて、田句はあつるも、弓の縁語といわれたるなり。一
ハ佐山也、但馬國と、八雲抄などにも見え、大か、ハ但馬とい
へまど、或ハ丹波ともいへ。一首はさハめくかなり。
そらか、のうらみとら、いひなる子か侍せん。

よみ人あしと

思とわま、いよせの山毛林なまれを毛かきりぬる物、けりけり

○抄云、いもうと、兄とふそへて、同胞の中ハラカラ、疎畧あることの恨を述
し、さうと、いよ、見、け、奇、家、于、集、に、ま、さ、ら、か、ら、な、る、人、の、う、ら、免、し、
まき、子、あ、つ、時、と、詞、者、あ、り、て、思、と、我、い、よ、せ、の、あ、も、ま、い、と、あ、る、を、引、合、
せ、と、思、人、ぞ、抄、の、程、の、め、く、な、る、い、よ、せ、を、ま、嘉、の、中、に、の、ま、浪、
ら、な、る、子、上、と、木、と、り、の、め、く、な、れ、が、な、り、。、然、れ、ど、も、又、下、三、子、を、
ら、か、ら、中、に、い、ら、ぬ、る、子、か、あ、り、けん、ま、な、る、ぬ、さ、方、に、又、え、侍、を、れ、
ぞ、よ、も、人、ま、ら、ん、れ、い、よ、せ、の、山、中、に、さ、ん、な、る、門、の、雲、の、
それ、ぞ、も、あ、る、う、形、と、あ、る、も、ま、ま、ら、同、ト、ケ、レ、同、ト、人、の、形、な、る、べ、
く、思、え、る、を、は、集、ま、る、二、五、と、も、い、ら、ぬ、る、子、の、侍、けん、形、ど、
何、る、ま、い、さ、か、や、あ、り、げ、あ、も、ま、ゆ、ら、なり、は、子、ハ、下、三、あ、も、別、記、

中も遠へ王。程引合せて見せし。妹背山も。紀伊國なり。万葉に云。
おくれぬてまつ。あはれと紀の國乃り。世の山もあはれ。物を。
なごれ多し。

歌あしう文

元方

おそろくとも色づく山秋止又五則末のともみぢら葉をよこ一本おられさ記がり。あやねくらん
○抄本。過昭乃。末の落もとのあはれくや世中のたられさ記がらためし
なごらんを本あややとあり。百こと小落ハ。或を夕べにおき。又も秋
半におき。或も朝早くきえ。又も星も秋など。おられさ記がらて。そ
かなくさど免な記物なる。は。葉のまづ。きも色こきも。さか
あはれかのおくれさ記がら落のたきて。深なるおやあはれ。と云ふ
て。彼僧正の奇を。本あはれに。さきなる。あはれ。又ハ。本秋小とありてよ

あはれおをあはれ。目ト数小よ方さ。さるに。ともあはれし。
立田山をこゆとて。

友のま

かくむかりうりふよもみづる。色乃こけきをや。錦より田の山とり。つら
○錦をたつと。つら。た。截キレの。を。つら。ハ。あはれ。俗シ子云。為シ立ツる。中
なり。は。あはれ。も。かくむかり。他。小。錦シ。紅葉の色。は。き。ゆ。あ。や。錦シ
為シ立ツる。山。とり。つら。と。つら。を。な。し。と。魂。麻。呂。と。云。
歌あしう文
よみ人 もみあはれ
かく我たり。田乃山のもみぢら葉を物あはれ人のた。あはれ。なり。けし
○かく衣ハ。枕詞にて。末句も緑葉なり。紅葉の色。は。き。ハ。我あはれ。もの
思ひあるもの。紅葉して。深なる。枝なる。よ。ね。と。云。なり。 かくむかり

小物思ふ人などいへる人も大かた小世間の人をさしていへる細
 子て即我身なりをいへるなりよ。秋風ふさはまわゆるかりの
 絲も物思ふ人の名をよかなんなどすては秋の人の秋のなど
 の人この秋の上よ云て秋。細皆同トんむ人なり。
 て我身の上のすにあたる。そ。山城こゆとて。

要之

○守山を述に國なり。抄よ。比良山の麓なり。一説に野洲河の也。
 森山と回不なりとあり。今思ふに古今秋下此要主時も
 山のほとり也よ先る。白鹿の時もいへる。そ。山ハ下麓
 のろくばをづきかへり。とあるハ。け西の方と回不時のこと
 小や古今のあハ。家集に。竹生島にまうづに。そ。山とい
 ふ不也。とあり。契沖法師云。も。山を。述になり。そ。山とい

といへ。里。家集に云。もり山を。美濃路へかゝる道にて竹生
 島のそふあは。そ。ハ。回不。美濃の述に小あり。小やといと
 き。これ。抄の。一説とある方もすてが。

あ。川の山乃山なり。も。山も。みぢを。す。秋を。ま。おけ。里
 ○抄小。山。ありて。ま。も。山。なれど。紅葉を。秋の。ら。ふ。ま。か。せ。た。る。ん。な
 る。し。と。ある。が。ゆ。し。も。山。とい。ふ。よ。つ。き。て。山。を。守。守。と。い。ふ
 名の。山。も。や。なり。は。向。ハ。も。み。ぢ。を。お。葉。の。名。と。して。い。へ。る。なり。
 上の。も。し。が。も。も。し。など。今。為。紅葉の。名。なり。
 用。云。子。い。へ。る。よ。ま。な。り。き。い。ち。し。げ

か。錦。糸。門。との。山。も。い。ま。う。り。は。も。み。ぢ。を。か。う。と。い。ふ。お。け。なん
 ○後。を。ふ。り。と。い。ふ。山。は。あ。ま。さ。も。今。よう。ハ。紅葉。時。さ。ふ。て。た。ら。お

らさば、常盤にてあれうしとあり。又、鹿麻呂ハ、錦を仕立まば、彼
となりて、錦ハ失す、故、志、錦を扱子裁とし、山も、鹿錦の失
る、ゆ、此、あまかしとあり、今よりハ、と、い、ふ、ん、を、つ、く
べしといへる。

か、衣、立、田、乃、山、の、も、み、ち、葉、は、も、も、の、も、な、錦、な、り、を、り

○機ありてこそ錦ハ出来ま。機もねくして錦をあら、る、を、あ、や、し、こ

を、た、る、を、な、り。 今、の、俗、ハ、タ、ゴ、と、い、ふ、同、ト、ハ、タ、ゴ、
も、機、具、和、名、抄、ハ、機、國、語、注、云、織、設、經、緯、以、機、成、繒、布、也、楊、氏、漢、語、抄、云、
高、機、和、名、多、と、見、え、万、葉、十、の、奇、ハ、機、踏、本、を、ゆ、き、天、川、を、橋、わ、く、
す、君、が、ろ、ん、と、め、な、ど、も、あ、る、物、な、り、

人、も、ろ、と、も、に、も、方、づ、を、ま、か、る、道、ハ、山、の、紅、葉、を、ら、れ、の、ま、よ

み、竹、々、の、水、

忠、孝

い、く、起、と、も、え、ろ、ろ、又、わ、う、秋、山、乃、紅、葉、の、錦、よ、整、り、あ、て、ま、さ、る、

○初句、す、は、の、ぬ、初、ゆ、て、ら、は、が、さ、か、り、つ、を、我、友、須、賀、直、入、云、直、入、ま、

の、人、中、で、我、が、昔、の、兄、弟、な、り、山、城、大、和、な、ど、の、初、句、衣、被、の、著、丈、の、中、
一、を、今、ハ、な、き、人、と、な、り、ぬ、を、一、著、と、し、ゆ、す、あ、り、此、前、の、初、句、も、此、著、丈、の、著、丈、子、弟、ひ、と、
な、る、と、い、は、れ、外、の、古、友、な、ど、あ、も、ん、を、つ、け、て、又、は、何、も、あ、る、べ、し、
と、い、う、ま、き、け、從、ふ、う、り、て、ん、を、つ、け、て、又、は、い、ふ、を、な、さ、る、と、い、
は、る、ハ、六、帖、子、林、の、山、紅、葉、の、錦、い、き、と、も、あ、る、ま、き、り、ら、る、中、の、
そ、か、な、さ、此、前、長、本、古、兄、弟、子、出、て、木、又、長、本、古、兄、弟、子、い、ら、く、の、紅、葉、
あ、り、ま、き、け、ら、た、ち、て、の、これ、は、い、き、と、か、る、ん、と、あ、る、あ、ど、
ま、ね、錦、と、い、ふ、う、美、丈、の、う、に、か、け、う、と、見、ゆ、れ、ど、此、前、の、い、く、本、

孝なりとらひ。くも。毎年の同トきを。あどなすべとらひ。まて。似
たるつひなり。抄子ハ。もみぢ葉を人をおやそくけなりと
いど。我もあどなうとんせ。そおハ。毛ハ子秋も紅子かそくけハ。せ
なり。とあるハ。二句の。足なくまとりハ。相の勢をつよく足するふて。
これもさくすけまども。狂はあそハ。我も足せとらひ。とせん方
まきくし。某なくまどハ。相。た。某。せ。と。え。ま。子。つ。ひ。て。純。の。相。を。
な。ど。も。足。え。て。て。お。を。ま。の。相。と。ハ。い。さ。か。あ。か。て。軽。く。け。る。う。万。葉
古。事。子。抄。ま。し。さ。て。足。け。く。お。を。足。せ。と。ら。ひ。と。え。る。時。初。二。句
も。た。大。ら。か。ま。我。も。あ。ど。な。う。物。と。ハ。足。げ。と。ら。ひ。の。と。あ。て。抄。の。人
は。あ。ど。な。う。と。い。と。ど。子。秋。も。ま。く。な。と。え。ま。で。ハ。あ。ど。な。し。

貫之

玉うづら加づき山のもみぢ葉をねもかゲハの^{こも}足えわ^またる^まあ^け抄

○初句ハ。かけの枕細く。葛城といまん料とせうまうなる。その万
葉ニ。ま。ハ。よ。思。ひ。や。む。も。玉。う。づ。ら。加。げ。お。足。え。つ。く。ま。う。と。え
ぬ。も。と。あ。る。奇。の。細。か。う。て。お。も。か。が。お。足。ゆ。と。い。ま。ん。と。え。玉。か
づ。と。え。枕。細。を。お。き。ま。枕。細。を。加。づ。き。山。へ。つ。ひ。か。け。り。ま。た。く。ぶ。
此。奇。の。巧。なり。されど。こも。一。首。は。ま。あ。け。か。る。ま。に。ま。あ。ら。げ。ま。て
ほ。あ。より。ほ。く。玉。加。づ。き。を。葛。城。山。の。枕。細。も。用。ふ。る。ま。と。ハ。な。れ。已。
一。首。は。ま。ハ。葛。城。山。の。紅。葉。の。う。ら。ハ。き。ふ。海。く。ん。を。ま。を。つ。ま。が。
又。ざ。う。時。も。ま。く。お。も。か。が。お。た。つ。う。お。と。つ。ひ。な。う。ん。か。こ。く
ま。と。は。毎。日。を。経。り。ま。し。を。足。る。な。れ。ど。数。日。あ。も。加。げ。お。足。ゆ。ま。ま
な。う。と。い。又。思。ふ。ま。古。今。二。ま。こ。ぬ。る。ハ。吾。州。の。山。の。櫻。毛。人。づ。い。お
ね。ま。わ。る。か。な。お。ど。の。ぬ。く。意。考。中。て。思。ふ。人。の。所。ま。ど。も。ま。ま。ハ

かきつたおまかげおのこ見えつ。つづつに丹日を移るすの
おとりのなききか。伊勢物語サ。入まいたまひやすん玉かづ
らねおかげおのこ見えつ。とあるなほおまひあまへく
や。葛城山ハ大和國なり。

秋を習乃たちのこかく。かくせどもみちる事もおがつのねてやねぬ。
○おがつのねてまゝハ。紅葉をえまをしく思ひまゝをかくてま
つひふ。足ざり百小教果るまであまきりかたとなり。此亦ハ
のめくなれど。意あなまへ。二句の「とあるハ」は向まへハ序と見え
末句もきはえてまゝとせゆるなり。
かみみ山をこゆとて。

きせいけり

つみき。秋云。紅葉雅
心かななり。おぼゆ
ける時。九月八日。家
の葉子。飾をまきせふ
おこせ。つりたるを。
又のあし。をまき
かへすとて。

後山や万加きくもりあざれど紅葉むかしあかくぞあきま見えけふ
○二句。曇りハ。鏡の縁なり。末句の「見え」とは。秋も。鏡のよせなりんか。
らとりとり子對て。然れども紅葉を何かく見ゆとりへるが。け
あけ秋白なり。あかくハ。あくみ明くを無しり。
となりにもみゆる時。九月八日。伊勢が家の葉子。あをまきせふ
つかま。たうなれど。又の「あし」をうてかへすとて。

○葉子飾をまきするハ。秋を習乃あてげし。久しかりしめんとして
のまかりなり。抄ふ。つりの香をまきまやさんとあやとある
ま。い。う。な。ま。し。かくて。は。細。ま。た。ま。ハ。あ。け。あ。ま。合。せて
つよをえんとし。

伊勢

教^{かぎりなく}あり交^まりて君^{きみ}がよはひをのむ人^{ひと}は^{おの}れもたゞる君^{きみ}の病^{やま}とならざるを

○龍麻呂云九月九日小童を贈るハさきより贈るを昨日贈りまじりて
を差せて返す小童他をあるより贈りまじりて病ハ葉の上におく物
綿も白くて花の上のりてかせしるを病ふよまへなりてよえり
なり。此病ふまじりてあしるをりてかへまよとあるをりてま
葉なり。かへま昨日贈る病をりてなり折る葉子に綿を差せ
たるまじりて返すまじりなり。されど返贈る綿の謝辞をえて返す
まじり。教ありて返すも病もまじりぬをどりてなり。のむ人^{ひと}
を返つたり。あたると君とは。名等を極する我君のと戯りて
まじり。あたると君と自負したるが無なり。病とならんとい綿
ふ令しやまじりとい。是病まじり一着のまじり。此昨日贈りれ

綿よ。汝も。教限もあまきぬやど小君^{おの}の齡を延動して。此病が葉
小名なき君の病となれ加しといふなり。

返し

後原野正

病にもあたる君が病なるは花の何とややくよなるら葉

○龍麻呂云。此返すハ。病にも限らぬ教といふ君の葉なるハ。花の
まじり。世をかりの教なるらん。さぞ回きりなるべし。と云まじり。
こまき葉の此の贈答の病の何なり。いくよなるらんとある。な
んの病ふまじりてしといへ。此病まじり小おまじりし。此葉の
此の葉の面目をりてりといふべし。葉ハ。万葉に又えりて。今ノ糸
の。これの雨子葉の花並にぬべきあつて。香をと。日本後紀小
又えりて。類聚國史に奉らる。又平城天皇の大内二年小。神泉苑に
て。即位以上ハ。葉を加し。をりて。又えりて。其時の病ふまじり。不
ぢをかりといふせ。類聚國史。又後紀小又えりて。此位

下向を信云小
い。花主
ハ。大平塔ア
ラウ。といふま
なり。

以上より、ついでハ、國史も後紀も、共ニ『葉ハ葉のまを誤傳人』なる盛
く、和名抄ニ葉の和名を、加ふるよもぎと、以て、葉の似たるより
いへるなごふ、一など、ついで、亦種不区えり、形不区どもふより、
考ふべし、さて上件のおまききをぬて足まば、亦、何れも、葉ハ、桓武の侍
代など、ふ、こ、た、て、此、大、守、國、子、ハ、さ、り、ま、つ、く、ん、さ、て、以、方、不、て、ま
く、も、免、より、色、香、を、め、で、つ、う、と、え、え、て、右、亦、も、物、然、時、ゆ、を、漢、國
中、て、も、切、ひ、と、ハ、食、物、の、料、や、し、る、ま、か、わ、て、離、騷、ま、
淵、明、の、句、の、ま、か、など、皆、然、なり、以、り、も、亦、種、カ、も、足、也、

○なかなりにせれば、死せれどとりあすなり、死せたるに
まあはば、

伊勢

葉乃く人小おきわんくも、^{もま}つなはにちとせ、^{もま}身をもも、^{もま}後ふなす、^{もま}式
○我がか、^{もま}を、^{もま}こ、^{もま}路、^{もま}葉の上、^{もま}お、^{もま}ま、^{もま}の、^{もま}ま、^{もま}が、^{もま}つ、^{もま}バ、^{もま}こ、^{もま}今、^{もま}月、^{もま}を
か、^{もま}ざ、^{もま}り、^{もま}も、^{もま}消、^{もま}ゆ、^{もま}べ、^{もま}な、^{もま}れ、^{もま}その、^{もま}葉、^{もま}の、^{もま}う、^{もま}へ、^{もま}お、^{もま}ま、^{もま}わ、^{もま}あ、^{もま}も、^{もま}あ、^{もま}は、^{もま}ぬ、^{もま}れ、

ちとせの身を、^{もま}後、^{もま}の、^{もま}め、^{もま}く、^{もま}な、^{もま}な、^{もま}す、^{もま}り、^{もま}加、^{もま}お、^{もま}と、^{もま}り、^{もま}なり、^{もま} 細、^{もま}さ、^{もま}ふ、^{もま}
長、^{もま}身、^{もま}九、^{もま}日、^{もま}と、^{もま}何、^{もま}ぞ、^{もま}あ、^{もま}ひ、^{もま}葉、^{もま}の、^{もま}く、^{もま}ふ、^{もま}と、^{もま}ある、^{もま}を、^{もま}大、^{もま}か、^{もま}さ、^{もま}お、^{もま}兄、^{もま}す、^{もま}ん、^{もま}登、^{もま}
き、^{もま}ふ、^{もま}あ、^{もま}は、^{もま}ば、^{もま}と、^{もま}瘰、^{もま}麻、^{もま}呂、^{もま}と、^{もま}王、^{もま} 亦、^{もま}師、^{もま}翁、^{もま}ハ、^{もま}葉、^{もま}の上、^{もま}の、^{もま}後、^{もま}ハ、^{もま}ち、^{もま}年、^{もま}の、^{もま}齡、^{もま}
を、^{もま}近、^{もま}る、^{もま}物、^{もま}や、^{もま}て、^{もま}さ、^{もま}え、^{もま}法、^{もま}や、^{もま}き、^{もま}死、^{もま}の、^{もま}なり、^{もま} 勢、^{もま}も、^{もま}ち、^{もま}年、^{もま}の、^{もま}物、^{もま}な、^{もま}る、^{もま}ハ、^{もま}回、^{もま}ト、^{もま}
後、^{もま}な、^{もま}れ、^{もま}ども、^{もま}後、^{もま}と、^{もま}ハ、^{もま}か、^{もま}ら、^{もま}う、^{もま}て、^{もま}何、^{もま}れ、^{もま}までも、^{もま}長、^{もま}壽、^{もま}さ、^{もま}る、^{もま}べき、^{もま}ふ、^{もま}菊、^{もま}の、^{もま}後、^{もま}の、^{もま}
め、^{もま}く、^{もま}ふ、^{もま}身、^{もま}を、^{もま}折、^{もま}し、^{もま}て、^{もま}清、^{もま}果、^{もま}さ、^{もま}る、^{もま}り、^{もま}かな、^{もま}と、^{もま}り、^{もま}け、^{もま}も、^{もま}何、^{もま}ぞ、^{もま}し、^{もま}とい、^{もま}は、^{もま}れ、^{もま}
たり、^{もま} 下、^{もま}表、^{もま}カ、^{もま}も、^{もま}は、^{もま}同、^{もま}時、^{もま}の、^{もま}あ、^{もま}兄、^{もま}を、^{もま}たり、^{もま}

おいらば

よみ人 ちとせ

きく乃、^{もま}花、^{もま}長、^{もま}身、^{もま}ご、^{もま}と、^{もま}り、^{もま}き、^{もま}死、^{もま}く、^{もま}れ、^{もま}を、^{もま}久、^{もま}し、^{もま}き、^{もま}ん、^{もま}林、^{もま}や、^{もま}あ、^{もま}ら、^{もま}ん、^{もま}
○月、^{もま}上、^{もま}中、^{もま}は、^{もま}て、^{もま}長、^{もま}身、^{もま}と、^{もま}り、^{もま}あ、^{もま}身、^{もま}ご、^{もま}と、^{もま}お、^{もま}咲、^{もま}来、^{もま}た、^{もま}れる、^{もま}花、^{もま}な、^{もま}ま、^{もま}久、^{もま}し、^{もま}何、^{もま}
る、^{もま}べき、^{もま}と、^{もま}え、^{もま}葉、^{もま}の、^{もま}を、^{もま}ば、^{もま}か、^{もま}ひ、^{もま}て、^{もま}林、^{もま}が、^{もま}あ、^{もま}る、^{もま}て、^{もま}あ、^{もま}ら、^{もま}ん、^{もま}と、^{もま}り、^{もま}あ、^{もま}ら、^{もま}なり、^{もま}

さだむれをハ、嘆本まばや。若う。九月ごとく小嘆まさればと云
多なる。万葉巻の。美濃國昔者郡多度山美泉 今云養老 の奇小いよ
へゆ人の言来流老人の言かゆち水ぞあふあふたぎのせとある
なごをも引合せととととと。

あふ——おへぞ長月ごとく小君が免かき小君はち布へとぞねまふ
○抄。昔月とて。長久のあふ——おへむ。此月の夕小。葉も君が為子。必自
へとなりとある。けをなむ。抱まども。君が為の。君が代などい
ふ君のまといまえざれど。人よあうりする。あふて。人をはなれなむ
べし。

こころをうりて
ほかの菊をうりて。

あふさをわかきてさける葉の花なびながう。こころあふち。あふちなれ

○板竹をハ別離ワカレて来て。そあふて嘆まされば。此を旅少てハあま
ども。旅のちりふて。我が嘆まされば。なむあも。あふち。十分には
あふちなむ。と云をなり。二箇子。又かまてとあうて。末句に
ほふとあるにんをつくと。葉の。旧来モトハエ生てあり。一雨をなつと
て。さき今他コトヨ雨子移したまふ。今あるはを旅といへるなり。松遺秋。い
づこあも。葉の秋をすむ。い。を旅とも思ふ。なん。秋を今
上。女郎花世へのあふ。里思ひ出てやどり。一むの。あや。あま。きなど
の類なり。

男の久し。くまむらううなれだ。

なむ葉いろを光かへ。——おあうらん花も。まやま君も。こころ
○名深かへ。ハ。古今秋。か。ま。む。林の葉を。一と。せ。あ。う。て。び。よ。ほ。よ

花かどぞ見よ。秋をおきて時々も遅葉のむらりかかすに色
 のまされむなどあるめく。落葉も色はうらひたさかきを
 なり。公忠集。霜中の菊をくむとつゆを。おくおふ色深かへ
 ち布ひつ。花のさかりまけながらも人などもあり。花もそそ
 やまハ。花を賞て。葉有らむむらふて。合葉のまなり。幻花。司が
 もそそやま人もあり。何れも春のあひまつらん。などもねなド。
 首飾もハ。古今。山おきまあやなく。花見んとう急ぐ人君が
 およひてゆく。但しは古今なるハ。おひん。などの秋も。葉の花を
 何れにまやうに。落葉も色をまて。うらひ。艶あやぞ。さやうに
 ちほひても。それうらひやと。兄もやまべき。我が人乃。まもせぬの
 に。とりななり。かして。けおねどハ。ちより。男の件へやすべきん

赤てよみおさるまはあれども。それを。男が對ひてまいた。花
 子對ひての。一人ごとの。さす。いなり。ものなり。此類。古昔ハ
 多くあつなり。古今。下ハ。おひん。おひん。ちりぎとて
 留候の娘。カヤウニヨミユエ。歩用ニカケレ已上。とり。身を
 らま。まことおお。ろき。たおひなり。今。は。ち。など。ま。さ。ん
 ぶ。なり。か。く。さ。なり。あ。ま。い
 づ。き。も。な。ず。ら。へ。て。ん。ゆ。べ。い

ちみぢら。葉の。お。る。兄。ま。ぎ。長。舟。の。あ。け。舟。の。か。つ。な。う。ら。い。し
 ○古今。秋。か。の。舟。の。柱。も。秋。も。な。か。み。葉。す。れ。ば。や。り。り。さ。ら。ん
 を。本。方。お。よ。ま。る。な。ん。か。又。た。今。る。さ。り。あ。て。あ。ひ。よ。せ。さ。る
 ち。も。あ。べ。い。末。句。ハ。抄。本。一。本。な。も。不。な。り。り。と。あ。る。方。二。句
 の。兄。ま。む。あ。る。怪。勢。に。よ。く。か。な。ひ。て。お。さ。り。さ。り。す。也。

歌しらす

いくちもとおきをか枝の山ごとふ風子みどろあーきなろん
○そもせび山毎子執るハ幾子機ありたるしーきなれをかやうに
多く執るなるとなり。

なちざりに枝の山野山を引けゆけがあーきをきぬりしをこそえくれむおろぬ錦をきぬ人ぞ那ーま
○なちざりにハ、まざとりハあーべしとてんがめし。道遠がてら。

枝の山べを越えバ人ごとふ自然の錦をきぬ人よわーとなり。初句
なちざりにと。思句オラヌ不織とかけ合より。菅原万葉。むぐろー小枝の理
山をわけくまばんふもあーぬ錦をぞまき。 おろぬ錦ハ人のまー
て不織なり。万葉十三。山のべののみのみ井ハ自然成錦をまねる
山かもとある自然成錦お同ト。

もみぢちちをわけつゆけぞ錦きて家子かへると人やえろる錦

○史記項羽本記又漢書。子。富貴不還故郷。如衣。繡夜行とあるより。故つへる錦
をきてゆるといひ。又まえなれ子をバ。枝の錦ともいひ。昔之系子。
句波のふるさやなまやもみぢちちのしーき残まろくまか子らん。
など多し。

君と

おむきていざわぎもこが鏡山こそて系乃おらんかけえん
○わぎも子がも鏡といえん料をえかけえんハ鏡の縁候なり。 鏡山
こそても。越えながるといそんがめし。鏡山を越て。他の所。思ふ子
いあハ。舟のゆかかなる板などふよれさるなと。紅葉の舟に
。末句。かけえんとあるを以てえろる。板とはなけれど。かなろれば板

のうとすゆるなり。

よき人不知

山風乃ふきのまゆくもみぢ葉もこのまかのもおちりぬ登りなり

○ふきのまゆくハ。俗子。ふく子シラガ。随シラガて。又吹次フクシ弟シラガ小シラガなどいそんがぬし。

このまかのもハ。は面波コナタカ面コナタカふて。は方彼方コナタカへなり。拾遺コナタカ物コナタカ。秋風の四方

の山よりおのがぢくみくま敷ぬるお葉かなりぬ。とある亦や似

たり。又思ふよ。古今七条后うせたまひける。亦時子伊勢傳のちう。おまきの波。あまのこ

まさる。宮の中ハ。え。秋の紅葉と人ハ。おのがちりく。まかまなど。

たのむかげなぐ。なりはてし。さくとあるなどの葉あま。何か人ハ。秋

別アくをりなごの奇アや。とも思ふれど。程た。秋の奇と云ん方

ねくべし。

秋乃おちり雨とほえてふりつる。そ風ふみさかふ拾遺。お葉なりけり

○後拾遺キ。ふの葉ちる。君をきわくか。さるぬきあられす。おも時

ふせぬおも。

まよりて。そふさ人のゆきさる。秋のまやし。錦あくらを

○初句も。錦を裁縁語なり。されど。こを縁よいへる。ゆくふて。奇のまハ

裁切カキキルまハ。か。さる。にまあ。錦あくら。お葉のちり。あををい

るなり。

本のをや。し。あ。ぬ。あ。き。の。つ。と。れる。ハ。ま。の。林。乃。お。葉。な。り。け。り

○あ。ぬ。錦。ハ。人。の。ま。し。て。不織オラガを。り。す。よ。ま。あ。ぬ。あ。き。を。あ。ぬ。人

ぞ。ぬ。き。と。あ。ハ。同。ト。く。ま。の。ま。や。し。ハ。雲。林。院。を。い。り。と。す。也

ま。バ。こ。も。彼。院。お。し。よ。え。る。か。又。ハ。を。色。ま。あ。り。お。の。奇。な。く。べし。

瓊麻呂云。雲林を人間なくぬ所の物なれど、不織錦といへる亦思
 ひよせしやうたることなむべし。不織錦といふも、はあ子てハ仙人など
 こゝろもあまき。世人の物はハあゝぬま子いつうとせば也。かくては句
 雲の林ハ、彼院の名をくらゐるる。編なかなむべしとてり。以院を今
 宋世ホ主て。皇路ハ、淳和天皇の離宮ホて。天長九年く、ふ行幸あり。
 雲林身と名づけり。任より、皇孫、承和十年の幸子ハ、雲林院と記ホ正
 えり。さて常康親王ヲ賜ひしを親王出御したまひては、そを遍
 昭子讓をへり。と、亦極ホ見えり。拾芳抄ホ、常康親王遣まことある
 も、中ほどの。よくあふ子けち、瓊麻呂の説のめくなむべし。さて上
 下の句の間ホ、まこしホ、たごち綱を入れてんゆべくや。云、句の文字
 末句のなりやりの辞、甚カあればなり。

秋風ホあゝもみぢらむををぬべし。あまありあゝ錦なりけり
 ○女郎花を女子いひたる子ハあなれば、秋の野の女郎をといふ女の

山のあまハ
 モウハヤチ
 ツタワイナ
 花ノフカヌ
 先ニ見ヤウ
 テアツタモ
 ノヲとツ
 泣勢なり。

織て、我あまおゝく錦なりよと、いふなり。昔々宋、秋の野の秋のあまき
 を女郎をたらむらむらつておまゝなりけり。

あゝ引の山乃もみぢらむをぢらむらり。花のまぢ子見せす。その致
 ○あま花、商人子ゆきてかゝらん。山ざうら風よりきぬホまゝもえり。

べく
 もみぢら葉乃ありあゝ秋の山へそをたらてくや。き錦なりけり
 ○は奇のまハ、後拾遺。秋、かゝ錦も見えまがよもみぢら葉のちる本の本
 をたらうかりやう。なごみ、数亦て、あやましくかな。あまのあまの本
 を、我が立ちきて、悔といふを、錦の縁子、たらてとさるる。あても何
 らぬ。裁断のまを、なんホを、とをいふべく。悔といふべの
 らぬ。さるなれをたらう。まを、なつとのまを、いへる。古今、難。思。

ふぢちちとわせる衣をかき捨てたて、まゝをき物ふぞありける。な
ど程多加まばとひひつるを、瓊麻呂云、けあまを、たちてとあるを。
立き、さきとえんも誤なり。たちとのを、ゆをこそきもえぬ。た
ちてとあるをや、梅、たちてと、ハ、錦を裁りて、錦をありしを、と
きて、腋キタ子裁クテバ、名来モトの錦の竹ハ、教ウ失するなり。さやう小あて、錦を
教ウ失スせたるを、悔ハしとちりなると。ハ、お糸の教ウ失スるを、錦の竹
の教ウ失スするに、よきなり。さやうと、ハ、は、從ユ解ルべく、是ゆ、抄
ハ、お糸の教ウ失スるを、きを、裁テ悔ハしきと、後ナるとあるも、いささ
ゆゆ。

立田川もくれなぬおなるに、たう山のお糸もみぞ、り乃もちらるらし
○さきゆかたり。

要之

たう田川、秋あしなれが、ふちかし、はくくも、お糸しに、たり
○二、向ハ、初向の上、ふらう、てき、ゆと、ハ、お糸、ふを、き、お、な、る、ら、ゆ、
水のもみちせり、と、お、お、と、ら、か、ま、ま、し。

よみ人あし文

もみちら、糸乃、は、く、秋、を、川、ごと、小、錦、あ、と、人、や、る、と、し、ん

○契沖法師百人一首 改視抄 云、華陽國志、子、蜀、時、濯、錦、於、江、中、則、鮮、明、也、ま、と、護
周、益、州、志、云、成、都、織、錦、成、濯、於、江、水、其、文、分、明、勝、於、初、成、他、水、濯、之、不、如、
江、水、也、と、ある、な、ど、あり、錦、を、洗、ふ、と、ち、り、お、し、を、い、は、れ、童、童、抄、子
も、益、州、の、青、衣、水、の、ゆ、を、え、う、げ、お、ろ、れ、お、ろ、に、よ、り、て、い、ひ、ゆ、
る、な、る、と、し、。

立田川秋をみなく阿せなくんあかぬお葉乃流るまばを
○あせなくんも、淡くなれ加しなり。万葉三久加之の阿まのまゝめが
いも船のまゝ〜まはハあせふるかも、なごもあり。今の俗も云
廻なり。

文室朝康

なみ〜け〜るよ〜もがなわ〜つ〜乃底のみる名もお葉ち〜やと
○わ〜つ〜る海のみなり。秋を世の中お本葉な〜てもみ〜海産
の海松和布も紅出モミツやと波をわ〜てるよ〜もあれ加し〜となり。
末句ハ散チやとふても字えハあれど、程あふに、すサやとの供子を
あ〜ご〜んか、一首おま、世上の本お葉に比〜て、海産の海松和布
も紅出モミツやと〜り〜るあ〜るは〜ぬべ〜し〜を、お葉〜て、あ〜るす〜で

さいもんきいさ〜加〜り〜た〜こ〜ちすれをなり。わ〜つ〜の

た文字を濁るを供なり。かな〜るは法む〜。冠梓考、わ〜の底の葉云。
方便海、錦津海、などあるが中に、錦を借字の〜方便ハ、方便もて人日
ふきて〜をかりて出〜なり。されど波と出〜る。その〜古事記を
即れ〜て〜云なりなり。そ〜和歌都美〜錦ハ、古事記を
考〜二神の〜を生〜錦、生海神、名大錦津見神云。わ〜つ〜
の神とハ、海津持の神とあ〜るを〜。また、和歌津毛和〜錦
を借字、和歌津波なり。津ハ、例の助辞なり。見ハ、毛和のありなり。故ハ
約〜と、美と〜。物〜を、万葉の例に、波津海とあ〜るもあれど、以海
を、美の假字子備〜の〜云。又和歌津美を海の類〜る名とハ
ふ〜錦の名より轉〜なり。故子、いと上つ〜海をわ〜と〜い
〜。神名の外ハ、和歌津美〜錦名〜。大津、飛を〜の伊代、の以
〜や〜い〜。又、古史万葉延喜式など、以、假字あ〜る。和歌
津美と出〜。和歌都守美と出〜。い〜。人か〜つ〜みと
よ〜と〜い〜。多〜い〜。人か〜つ〜みと
〜とあり。これ〜。何〜も何〜も鳴〜。

若原おきかき

お葉ち〜る〜小波〜川秋なれど、おみ〜ら〜子〜も〜記〜ひ〜なり

○花とまはの花をいへり。色づきたる衣葉の風ふちる浦子。波もたて
ぎおきよは波の花も海あやうなるをいへし。風のそよくと吹来る水
合せて波のむしくとまわるとよと見るほどよ。木の葉のまじくと
散て。海上も浮ぶさ方。るるうめし。

よもろくば

わづらひの秋もむらう山姫のぬきをを人をも紅葉とつひけふ
○わづらひの秋ハ。海神なまのうまのりくがめし。海もぬきお葉を。
山姫の海神もまの帯なりとて。まて人間のまみちとあづけ
る物も。山姫のぬきもなるよとなり。古今^秋下。三田姫たむる井
乃あれどこそ秋のお葉のぬきとちとめと似るあやて。つひめ
しことなり。なむけ。又ぬきもすハ。下^歌。小毒しつあべし。

番々

目ぐるりの秋もいへなくすゆるも秋夕ぐれもなれをなりけり

○いへなくハ。無暇^{イヘナク}にて。俗もせましくなくとつあまをいへし。さうでも短
き秋の日の。九月の末もて。夕暮もあまなりとれを。朝の秋もいと方
ながよ。せむしくすゆるよめといふなり。九月の末もなりたる
るやうなれども。秋夕ぐれもあまなる。必秋も末
小なりて。又夕暮もあま。と云ふとすゆるなり。

よもろくば

風のたよのかぎりとは秋やせむしらん吹るごとくお葉もまびーき
○初旬ハ。四旬へかけてるいへし。かぎりとは秋やハ。秋やかぎりとは
いへんがめし。風の香の吹来るごとくおまびーきハ。九月も末も
まで。秋のかぎりとは迫りつんと云ふなり。かくまも。旬の次
をかねて。るるるハ。実

よいかかぬぬやなれども、んぬがと起あそま、かりに清音をかへ
て又る時ハ、んぬやすき物なり、さきさとりたるよあそま、そとのぬ
く、初句よりよきく、さきさとりたるよあそま、そとのぬ
まを何れもよべきなり、かくては奇、吹くることよ、琴をこめ、
るなり、さき其琴の方にとりてハ、上旬、風の音のかぎりとい、調子乃
言き至極と、いふことば也、せきつらんを、表の言、あそま、迫りつら
なりと、琴の弦を、いと強くはりて、善好きき玉極を弾くと、いふことば
よ、一、拾遺物、松ののち、松のま、んぬすゆなり、さきせきあげて
風よ、つらら、とあるなども、おもひ合はるべし、又上、松ののち、風
おし、つらら、をよか、せき、ま、田、始、こ、松、ま、つ、つ、と、何、る、を、も、又、合
すし。

もみぢら葉にもあれるかりの風よ、ハ、舟の歌、ささ、う、の、子、な、り、り、ま、ま
○石の海とハ、秋の舟をいへるなり、古今、上、秋、上、晴、わ、る、石、の、な、み、さ、や、る

つらん物よ、ハ、君の秋の上乃、秋、一首、お、ま、ハ、あ、ふ、人、間、の、神、の、海、よ、
あ、つ、つ、る、舟、を、い、は、る、石、の、海、よ、ハ、と、い、ひ、よ、ま、り、つ、ら、ら、ん、か、と、も
あ、へ、ど、狂、れ、ま、ま、よ、ハ、あ、つ、つ、ら、ら、紅、葉、よ、お、ま、た、る、海、よ、あ、つ、つ、
ま、ま、を、見、て、か、ま、ハ、石、の、海、よ、ハ、舟、の、う、の、ま、り、つ、ら、ら、よ、と、い、ふ、ま、
と、の、ま、あ、ん、方、あ、ま、あ、お、ち、つ、か、お、て、ま、ま、ま、や、う、な、れ、ま、は、後、の、説、の、
方、な、ら、ん、く、と、い、ふ、ま、
あ、い、つ、ら、ら、つ、ら、ら、男、お、ま、ま、と、は、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
か、つ、
左、一、并、
右、也

大かこの秋のそぎにまびらきた物思ひをよあそまもあるか耶
○一、通、つ、
ぞ、ま、

き。女の件へ通ひす。たる。あて。もと。より。も。秋。の。な。か
ら。い。ゆ。り。て。の。り。なり。それ。を。世。乃。さ。び。まり。たる。考。好。り。よ
て。さ。し。み。ず。り。が。り。し。き。わ。さ。は。あ。り。き。毒。く。と。海。氏。物。語
など。を。よく。見。き。べ。ん。は。ら。り。り。り。なり。但。し。男。女。お。あ。り。て
お。こ。な。ど。り。初。也。志。の。奇。の。か。ぎ。り。も。皆。以。定。なり。と。り。し。子
も。あ。り。を。中。よ。い。と。ある。ま。し。き。み。を。加。す。の。奇。な。ど。も。す。い
あ。ま。ど。も。そ。ま。と。も。り。なり。比。西。の。詞。も。な
ど。ハ。上。子。り。こ。り。め。く。ぞ。と。り。り。なり。

秋ふかしよそにのこまきく白き後乃雅がことの葉子か子なうらん
○私を厭きあひたるの深さふをさるもよその人となりてあひ
たるやうにす及びつまば今かく訪ひあふもはるがかり来あへり
よハあつと誰がをへたる言葉子かりまてかくおとつたるにの
とてか。の。秋。の。い。さ。え。た。る。り。を。あ。り。ぬ。あ。も。あ。り。ぬ。さ。り。子。ほ。の。免
か。り。たる。なり。

かまふなる男の秋と人里けるふ。こ。こ。こ。り。ける。ま

昔の承香殿の河と記

とらふの秋も可れ子すゆるもかりふや家を人のたのまきし
○と向き訪りす可れ小秋もすゆるいと云えたり。秋を厭のまき
節なるも秋もかく稀小訪ひあふハ元来我小頼子思をせあひし
るも一神の傳ハ假初のすまびすおとつたるあやとなり。假を
雁小そへたるも編なり。秋小厭をも軽く餘情子あつたなり。
されどは秋子厭をみく免するも一箭の餘情なり。あけ表へたつ
えんまわらし。

紅葉といらてきさのぞとを女のもとにきし。な。ま。

○是ときさのぞを抄子紅の縮のきれなり。とあるが如し。縮布
のきれをさしでとりふも裂拷のきなり。和拷をみきととも

ぎのゆゑに、なかくかゝるとのまゝ、わて付されるなり、といふれり。同じ語の裏核もいと多くあるを、玉緒を初らき見て、んんん。

野———文

よみ人 も 不知

る。身の秋——もことふさやけきいぢる。もみぢをよるも又よよか

○古今 秋 秋の月山べさやかよて〜せらちおつ。お糸の敷をんよと

か。

板宮の内侍は、魚輔朝臣志のびてかよはけし侍々、あをとりて、せ

はくで、内侍ふきしける。

など我身あをを紅葉となりくにん同トなげきの枝ふこそあま

○我友古道云、魚輔朝臣の内侍の件へやうあみを、は佐若の、中途子

て取て見て、そみの端なごふいあををまゝにて、さて内侍の方おやり

たる、すゝとをえり、ももよりいよ〜人も、内侍子んをかけてあつる

子ハ、舟の上まであつれり、さて魚輔朝臣あみの中、あは細なごふ

なげきふよせたる何あ〜〜なご〜〜。さゝあふ同トなげきのとは

あたるなご〜〜。さゝごを、魚輔朝臣をも同トなげきとま〜〜い〜〜く

もあ〜〜。一首あをを、魚輔朝臣も我身も、とふ君を思ひて、同ト

歌の枝ながく、魚輔朝臣ハ、あわもあつきてあをを、いかなれが我身

也。下葉のお糸のぬくかたれ〜ものふなりて、涼きん侍を、あ子

もあつきて、なご〜〜と〜〜なご〜〜と〜〜。下葉紅葉と〜〜い

子、およいまご見及をされども、使ておのこ〜す也。あ〜をハ、下葉な

ふて、ハあ〜〜。秋、や〜〜秋、か〜〜これ物が〜り〜侍、あひごふ、か〜りの鳴〜

は侍々れぞ。

あかしらを見つゝきものをかりがひ乃つぐこむかりふつてゆくらん

○ 菴麻呂云。此のふん見えきいかに味をい知らまぬなり。故
考つる小こを緋袴袴のふりて。かりらをかひさかりを以て為ま
りなり。かりらを見つゝき物をとりつき。秤の用なり。菅葉万葉上ふ。
かけりまば子いねこがひも教わぬなぞわが意の色よをかりね
ま。此多帖秤のとあるなごをも引合せし思ふべし。つう。まふ
け従のめ。まてお表あかしらむハ明くあるばなり。つひこ
むかり子ハ。何知らふつて。つぐのほふとつしきなり。万葉十。秋
風ふ山飛こゆ。かりがひお表まきかゝるまかろし。
葉の花をねふとて人のつひ付けまき。

○ 或人の家の兼むを人のをねるを。まのいかりを。つひとがむ
るを。此後者のまてふたるすなり。つひ付とハ。そのを替め
つなりと。つひの子も思ふなり。替えりよを。つひとの
まいつるすハ。上。ま中。あもつに。

よみ人不知

いづつて不病小おかし。花かとしてんも。いづつて。ぬ人やをりむ

○ 金足見まやしもせげふすまねかり。花かと思ひて。まは賞観せら
るんをもち。ぬ人の折たさすやとつしなり。まは子おあそ
ま。た。まは子彼結た。つしとのつし。まはすま。おくまを。軽くふく
免するなり。上。中。秋。乃。時。の。ま。は。子。お。あ。そ。ま。女。命。花。ま。ふ。人。な。ま。ぬ。ま
つやまふ。

身成なりいそぬりをらひなどなげき侍々ころろ紀本則がもさうい
かゞぞとやとやいひあゝこそ侍々れぞはに葉の花を折てきしを

○身成なり出ぬき左位など昇進せぬりなり今世もなり

あがるなりのがるなどりあり回ト。

藤原忠行

枝もなりもうつろふ秋の花葉れがもてハかげなくなりぬ身成なり

○父祖の蔭カゲふよりて子孫の出身ひすもを蔭と云ふあハと蔭位のを花の枯果て蔭のなくなるふ人たるなるべと師病いまれと
一首妙をハは菊の枯朽くを忌まバ孫子も蔭も朽くなり果る
なんとりを表ふて我がかく右位も進ずばあるも孫子ハ表へ
果て父祖の蔭もかひなくなり果るなんとりなり。又あり子。

我がかく昇進をもせるあて又まバ子孫ふ至てハさるかげもなく
く裏へ果るなんとりをあて蔭位のをバあく免られるに
もあんか蔭とは選叙令子凡授位者皆限年廿五以上唯以蔭出
身皆限年廿一以上云凡蔭皇親者親王子從四位下云凡五位以
上子出身者一位嫡子從五位下云三位以上蔭及孫降子一等云い
などあるこれ蔭位の令なり。

返一

ともりのり

あがくもそよもひのおつふ花なれど子代の秋もぞかげハまげらん
○年はてまく齡を延ぶとり葉の花なれどかげなくなるなどりハ
子もいまぞかあん子代の秋を終え未長く蓄るなんと云て父
祖の蔭のなくなるなどりハいまぞかあんき延びに昇進る

て。筆えのちとらふなり。 葉の茂るもを 齡を延ぶといふなり。ハ
風俗通名ふ及らる。南陽鄆縣乃甘谷也。慈童などの。もろこしの
故事より多くとり。

延喜寺時秋小一うさありけきばをける。

つゆ記

秋の月光さやけか子らもみぢら葉乃おつる影さへ見えわたるらん

○古今秋上向ともふさうちかきとぶかりの教さへ見ゆる秋の秋
の月。

秋抄又風

よき人抄二ちび

○つなまゝなをまねまぬかりがハ喜如ふともかきとらざらん
秋抄又風

と抄子あやゆかへん。 又思ふ人の信ひて他へりなり。に
送る人のよしたるなごふをあつたか。須磨老源氏子。後ひまて
る子を良清とよめて旅のそとぶかりがもつふおくれぬほどぞ
なごさむとりつるなどのさかふあふれたり。されどこそ試
みたり。 藤原云抄の後のあつて。さき下句のかへるとも
とりつ。ゆるまをかけつ。をまねまぬと。なまかきとぬとを。か
け合せつるなごべとらり。

をととの花かづゆとんとて葉あり葉のありとまきくあふ。さひよき
たりくれが花子つとてはのそけ。

○抄子。葉をかづよかざりなり。一説。童舞のかざりの花
と。さなぐともふやとあれども。たかあもんはがさき説

なり。正明云。万葉十九卷。かゝ人の舟をうねてあそぶてふ
くつぞ我せこ花加づせよとある花加づふ回トかゝるべ
けまぞ挿頭カサシゆとせえさう。ゆよときいともくあつる
ものか。いぶか。とて。程よく考へて。追考子記すべし。

とね人ふをうねふなりとときくの花思ひつゝもふぞもふおまきける
○はあねさといきかたかなぬろちす。あひの。意好をよえて。彼
男は女をらんあぶなりとひひしあなをいし。らんを上向ふ陸し
てふ免り。皆人子をしる。葉と河まども。さはなれぬふ。君がえふ
とあひをいしとたり。とあまども。あねまのいせ。えまば。意のこめ
多ねくたぶすえさるまふ。外への家の花を。皆人子折らきなり
とま及ぶ。い方好ま。君がえふと。挿しをり。とりあをり。の

めく思を。中へはをな。んよハ。詞也。花加づゆをんとて。葉の河
とときく。あひ人のらんよ。おこせたり。けれど。花ふくもて。決のそ
しる。なごあぶ。思を。なり。も。いづ方のも。皆をり。そ
て。付まど。思ひあひの。花のま。と。ま。付まど。なごらひ。おこせ。な
ぶし。詞も。別。の。と。さ。ゆ。河。に。より。て。意。あ。や。と。は。許。も。お。ひ
ども。す。あ。は。意。の。や。い。も。ま。え。ん。又。詞。也。あ。菊。は。あり。と。き。く。あ。ふ
と。あ。も。あ。ぬ。人。子。あ。い。ど。挿。む。つ。び。あ。い。え。あ。り。と
も。す。え。ざ。れ。な。り。 飛麻呂云。末句。意。ま。お。ま。き。ハ。す。く。も。お。ま
ける。とり。よ。え。な。る。べし。我。者。の。物。ハ。あ。れ。ども。秋。の。末。子。なり。え。を。
目。こ。に。見る。とも。な。く。あり。な。る。べし。た。皆。人。が。折。たり。と。家。人
な。の。い。を。す。た。る。が。今。と。ひ。あ。い。よ。り。と。足。ま。ど。君。が。あ。ふ。と

て、少一ハ珍屋とあるにありて、まあうすいぞ、といふことなりと
しつゝ、は從御とぞくおぢ也。

影しらす

うら風下りまかすふ舟や木の枝舟舟のうらうら今を二年今を二年

○抄子ハ、舟舟上りりやうとととハ水面ふ舟舟うらまゝる上を、舟の
影なりと云。又或説子、藤葉なり、舟の上よりハ、舟の影なりとなりと
あまもといかふあゝん。今抄子子ま、舟の影かなる木、海上にさ
るを思ひやりとよをさしめくもすゆゑなり。二白子、やといひて、赤
白小らんとあるをみて見るに、上中、秋秋の池の舟舟上りて舟なま
き柱の枝舟舟やさほんとなあるなどの、みづかき舟を浮べたるを
とすゆゑとは、まなるやうなれどなり。但初白のさる者、あにもり
べくれど

藤葉のすめめくもすゆゑも、好いかなあゝん。例乃類もよみ人も
あつまざれど、考ふべきやうなりし。師云、舟とりの物を、風子百か
すものなり。風も天空を吹くものなり。舟も天空ツラ子あるものなり。
舟とより天空をうら風をたうらの舟のすめまき、今かくのめく、舟
の上をこぎわつるやあゝん。とまきにもあゝん。舟とより水上
海上をうらゆなれど、舟舟上りといふ。抄子うらまゝる舟をいふなり。お
佐日記ハ、十七日正月なり。うらゆれりまなくなり。又舟舟といふも、おと
ろけまき舟を出して、こぢゆゑはるふ。まき舟も海上を、同ドめく
おなん有ける。うづもむかひ舟をのこま、舟ハうらがの波のうらの舟
を、おまおさうみのうちおさうをといひけん。きくされ子まけま
なり。又ある人のまき、浪のまき舟舟うらよりとと舟のまきまき

もろきかつくなまぐー。これをすて。ある人又よきる。かげ見えどは
の庭なるむさかしのやこ。だるる。我ぞわびしきとあるを引合せ
るるるる。といされより。

ゆみぢらぢらうつもれるおの^{おぼ}もとふて。

とみぢら^{のち}ちるこぢもとふとたりけと色ゆく林やいづちなうしう舞

○重之素。いぢぢら^{のち}ちるをよするゆぢらちをおほかまど林をとど免てんる
時ぞなれ。

わすれぬける男の。お葉を折ておろし。侍^てくれぞ。

思ひ出てもよハあうど林を門る色のかぎりを見するあなるらん

○九月のつごもりがさぢりとも。あ後の奇の次序やてあうまうら。と
まハ紅葉を紅葉る色の限といへるなり。君の我を^{アキハテ}原果あへるんを

つがの^{つが}結云。右月の
はごもりは日。お葉
お水葉をけく人
の侍よりおこせて
侍くれぞ。

又せうふてあうんとりなり。

なが月のはごもりは日。お葉をむをけく人。おこせて侍^{侍り}くれぞ

○花を侍情。水原抄云。庖丁諸云。氷魚子ハ紅葉をまぐと云く

とんる。従角花中も。何とちのむをまぐとせまて。いぢら

木の葉子かきまて。とんる。何とぶなとあり。か。まバ。氷魚小

紅葉を添つるも。故実あるすとんる。正明云。本草小鳥を

つるも。常情なり。真をつるも。めづらしきなり。後云

幸の軍の繪網子圖あり。さく氷魚を。山川小鳥るはやとり

魚の今がー肉あるものふて。尾張などふて。もろこ

真のめく白しとい。又。尾先の方。いさか紅なるものよ

しなり。あふりて。めづらしきなり。もろこ。多か。瓊麻呂云。い

ものなれど。おのきと。いま。え。なる。なり。瓊麻呂云。い

洞書の紅葉を枝子ハあつて葉柄がなごい。氷真をつけて
とハ、木の枝などふををつけてるめく〜たるあきあきで紅
葉子副（副）なるべ〜。もとより山さ紀真を、なごいのめく。枝
氷結いつ〜ききも何〜いばなりとりり。

ちかぬむすね

宇治山（や二平）の紅葉を見ずハなが舟乃さゆくむをもあ〜まぞ何〜

○宇治川の氷真をうち山（や二平）の紅葉をほたるなごい。新のこも紅葉
をえあき。秋の雪裏をもあ〜いあ〜んを。これを移ひ〜れどこそ。
時節のうつ〜ゆくをもあきとて。日（日）を氷真をかけり。後拾遺
冬。宇治子まかりて。綱代（綱代）のこぼ〜れるをえてあき。入江川のそ
やくあ〜らハながり〜り何ふより〜かむをさ〜さん。

九月つごもり

つ〜ゆま

長月（お長）の何（何）も明（又）の月（又）もあ〜なが〜はかなく紅葉す（くまぬ）なごいなり

○小の晦日などふ。廿八日（又）の月の朝（朝）のちどふもあ〜なり。有明の月ハ
有明が〜。まかなくと。有無の字を對〜してあ〜なるべ〜と。抄ふも
何まども。有無を對（對）子語ををさ〜れ〜るあ〜もあ〜れだ。た〜あえ
たるま〜。あ〜なるべ〜と。師翁い〜れり。一首は。月を秋の
物〜して。月末の廿八九日（又）の月ハ。有無の月の跡〜あるをえて。彼
有るがあ〜めくあ〜なが〜。秋ハまかな〜るけ〜きなり。と〜あき
なごい。つごもり。晦日（晦日）ふもか〜〜〜。上（上）あ〜い〜るが
めし。又晦日（晦日）あ〜も。有明が〜。月ハか〜のふ見ゆ〜りあ〜なり。

おな〜
おな〜

みつ〜

いづかゝふれきなりぬらんおむつかなあけぬかざりハおむつかなあけぬかざりハ おむつかなあけぬかざりハ

○今日まを九月と十月といふ節ありを十月といふ節は今の秋の万も秋

へつくふか冬へ属くふのとすづ起ひていやくとく思へど明物よ

且十月なれば今秋の明物をも秋は冬と思ふとなり。此秋ぞ

と思ふんとくふ。秋をくくむるもぬり。此年の上旬の言ハ古

今^上ふ一年晴うちに春ハあまきり一とせをこぞとやいせんこと

とやいせん。とあるはよく似たり。二旬のなりぬらんと云何を信ふ

と云て、敵ニナル味方ニナル夜ハドチラノ方へツク物ゾと云

などのナルと云何と云。

後撰和歌集卷第七新抄

